

文化財
NEWS速報

描かれた松尾芭蕉の句碑



写真2 「広茗荷集」
(東京大学総合図書館蔵 洒竹文庫)



写真1 磯ヶ谷紫江編『墓碑史蹟研究』9
(後苑荘、1932、国立国会図書館蔵)

荒川ふるさと
文化館だより

荒川区教育委員会
荒川ふるさと文化館
荒川区南千住6-63-1
TEL 03(3807)9234
登録(25)0049号

松尾芭蕉の碑 素盞雄神社の松尾芭蕉の碑（区指定有形文化財）は、荒川区の文化財の中で著名なもの一つです。昔から地域の史跡・文化財として何度も紹介されてきました（写真1）。例えば、大正8年（一九一九）に、南千住町役場が編纂した『南千住町勢一班』には、「ばせを此地ニテ咏ゼシ句ヲ鵬齋ノ筆モテ石ニ刻ミシモノ、素盞雄神社境内ニアリ」と紹介されています。ここでは、「おくのほそ道」の「行く春や鳥啼く魚の目はなみだ」の句は、南千住で詠まれたと解釈されていたことが窺えます。

記録された句碑 それはともかくとして、この句碑のもつとも古い紹介といえれば、今のところ「茗荷集」（東京大学総合図書館蔵洒竹文庫）を挙げることができます。江戸とその周辺にあった24の芭蕉関連の碑や庵を紹介した貴重な文献で、「行春塚」の名で登場します。文政5年（一八二二）9月に雪水軒茶静がまとめたものということも、建立から間もない成立になります。

「行春塚」は、「千住小塚原天王の森」にあります。文政3年の冬建之。芭蕉行楽の像を彫、巣兆の画、鵬齋が書するところなり」と紹介されています。芭蕉の姿を「行楽」と表現している点が少々気になりますが、挿絵があるわけではないので何ともいえません。

描かれた句碑 さてその6年後は、今度は野桂という人物が「広茗荷集」（東京大学総合図書館蔵洒竹文庫）という書物を編纂しました。こちらには、スケッチが添えられています（写真2）。野桂は、文政7年5月晦日に碑の前に立って、「夕立や洗ひあきたる宵祭」という俳句を詠んでいます。丁度 天王祭の直前に訪れたのでしょうか。

その挿絵の芭蕉ですが、確かに「行楽」しているように見えなくもありません。けれども、私たちのよく知る芭蕉像は座っているはずです。碑の中の芭蕉が立つたり座つたりするはずもなく、見間違えたのか、写し間違えたのか、はたまた作り替えられたのか、今のところ判断は保留せざるを得ません。もつとも、単に絵の力量の問題かもしませんが。

当館では、句碑をはじめ、荒川区の俳句に関する歴史や文化について集中的に調査を行っています。荒川区では、平成26年度、「奥の細道サミット」を開催します。合わせて当館では、企画展やパネル展等を企画しており、調査の成果は隨時紹介していく予定です。

（亀川泰照）

○
（二）案内 パネル展「俳句を探ねる小さな旅—芭蕉・梅翁・一茶—」
平成25年10月16日（水）～12月1日（日）

文化財NEWS速報

「日暮里養福寺の毘沙門天像」

平成22年夏、日暮里にある養福寺の仁王門（区指定有形文化財）の裏側に安置されていた仏像が、平安時代の制作と判明しました。従来は、近世の仏師が古代の仏を模倣して造立したものと考えられていましたが、彫刻史が専門の清泉女子大教授山本勉先生の調査により、平安後期、11～12世紀の仏像であることが確認されたのです。同23年1月には「木造二天王立像（伝持国天・伝毘沙門天）」という名称で、荒川区指定有形文化財になり、同年夏、区の補助を受け本格的な修復作業に入りました（写真2）。養福寺を訪れたみなさんは、向かって左側の毘沙門天さんが無いのにお気づきだったでしょう。

江戸の古仏は地方仏！ ところで、養福寺の歴史を紐解くと、創建は、江戸時代の初め元和6年（一六二〇）で、真言宗の寺院として淨蓮さんが開いたとされています。江戸初期に創建されたはずの寺院に、何故、この2体の古代の仏像が安置されていたので

しょうか？



写真2 修理前の毘沙門天の上半身

頃ではないかと推測されます。仁王門は、中興開山の義高さんが造営した門です。義高さんは、足利13代将軍義輝の孫義辰の子で、高野山高台院住職を務め、5代将軍綱吉の招聘を受け江戸に下向し、湯島に円満寺を開きました（『御府内寺社備考』第4冊）。当時、養福寺には百觀音が祀られていたが、これらは義高さんが高野山から移した仏像だったそうです（『江戸名所図会』）。仁王門の二天王立像は、この時義高さんが地方から将来した仏像である可能性が高いといえます。

古代の姿を未来へ伝える

今回の修理は、仏像修理専門の工房に依頼しました。修理は、山本先生の指導を受けながら、慎重に進められ、これまでの修理の際に施された適切でない補修部分を除き、極力当初の状態に戻す作業が行われました。解体した結果、本体と右腕・右手は平安当初のもの（写真3）、左腕は江戸時代の後補であることが判明しました。また、胎内の上部・下部に地蜂の巣の跡があり、昭和の修復時に巣を取り除いたことが窺えました。虫損も発見されたため、これ以上の被害を防ぐための簡易燻蒸を行いました。



写真1 完成間近の毘沙門天像

江戸の古仏は地方仏！ ところでの、養福寺の歴史を紐解くと、創建は、江戸時代の初め元和6年（一六二〇）で、真言宗の寺院として淨蓮さんが開いたとされています。江戸初期に創建されたはずの寺院に、何故、この2体の古代の仏像が安置されていたので

石津寺の寺伝によると、延暦2年（七八三）最澄が比叡山延暦寺の根本中堂にもう1体を当地に堂宇を建立し祀った、その薬師如来が江戸の寛永寺の本尊であると伝えています。

養福寺の場合、古仏が迎えられたのは、仁王門ができた宝永5年（一七〇八）の



写真3 解体修理作業中の本体背面

見えない部分への細かい作業を重ねた結果、平安時代のお姿が、現代に蘇りました。心なしか毘沙門天さんも嬉しそうですね（写真1）。これから、もう1一体の持国天さんの修理、そして仏像が置かれていた仁王門の修理が進められる予定です。数年後に

は、往時の雄姿

の二天王立像が、

養福寺の仁王門に凱旋することでしょう。乞う

ご期待！

〈野尻かおる〉

あらかわの記念碑――

其の2

滝沢馬琴筆塚の碑と「烹雜の記」



写真1 滝沢馬琴筆塚の碑
(青雲寺境内)

馬琴と筆塚の碑 西日暮里三丁目の青雲寺に滝沢馬琴の筆塚の碑(写真1)。区指定有形文化財)があります。この碑は文化7年(一八一〇)、「南總里見八犬伝」を代表とする様々な作品を執筆した有名な戯作者の滝沢馬琴により建てられました。碑文は亀田鵬斎が書きました。鵬斎は書に長けた金杉在住の儒者で、素盞雄神社(南千住六丁目)の松尾芭蕉の碑や石浜神社(南千住三丁目)の亀田鵬斎の詩碑(ともに区指定有形文化財)など、多くの碑文の書を手がけています。

さて、筆塚の碑には建碑の経緯が「著作に綴られた無数の言葉は馬琴自身の工夫により生み出されたものだが、20年にわたり、筆の助けを借りて書いたものもある。筆の頭が禿げたからといって無碍に捨ててしまったら、祟りがあるかもしれないのに筆を埋めて、江戸の郊外で供養を行うことにした。そこで、筆を布で包み、素焼きの瓶に入れ、永く安置されることを願った。塚は新堀山の上にあり、そこに碑を建て碑文を刻むことで、筆の労を忘

れないようにした(以上、要約)と記されています。ここで気になるのは、場所が「新堀山」の上と記されていることです。新堀山自体、今は聞きなれない地名ですが、これについて馬琴が考察しています。「烹雜の記」と新堀山 筆塚の碑が建つた翌年に刊行された馬琴の随筆「烹雜の記」では、序に筆塚の碑が引用され、本文では「新堀山」と題した章が掲載されています(写真2)。

「新堀山」の章では、過去に新堀や新堀山の名称が確認できる事例を「江戸古鹿子」や「紫一本」といつた地誌などを分析して検証しています。その中で、青雲寺の山の上有る舟繫松の碑には、「山を道灌と曰ひ、里を日暮と曰ふ」とあることに触れつつ、近頃「日暮里青雲寺の上なる山」を道灌山だと混同して言う者がいるが、元来は新堀山と呼んでいたのだと述べています。どうやら、当時の人がとにかく新堀山と聞いてもどこを指すかがわからない状況になっていたようです。しかし、そうなると馬琴は、なぜ「烹雜の記」でわざわざ一般的でない「新堀山」を取り上げたのでしょうか?

馬琴は「烹雜の記」で「新堀山」について考察することでの自分の建てた筆塚の碑の記載が間違っていることを主張したかったのかもしれません。

山から下りた碑 さて、江戸時代に山の上にあった筆塚ですが、現在は碑のみが山の下の青雲寺境内に移動しました。一方、山の上の土地は、明治7年(一八七四)に旧大名家の前田家の墓地となりました。そこで、筆を布で包み、素焼きの瓶に入れ、永く安置されることを願った。碑は新堀山の上にあります。舟繫松は、「江戸名所図会」に建つてあります。

(澤田善明)



写真3 江戸名所図会
日暮里惣圖(部分)(当館蔵)

の「日暮里惣圖」に描かれています(写真3)。青雲寺の境内は今よりも広く、山の上までたくさんの人びとで賑わう庭園が広がっており、一番高いところに舟繫松が立っていたことがわかります。つまり、筆塚の碑も、そのすぐ近くの好立地に建てられたということになります。

しかし、この二つの碑の記述には相違点があります。前述の通り、舟繫松の碑は安永元年(一七七二)に建てられたというので(「武江年表」)、筆塚の碑よりも先に建てていた訳ですが、そのすぐ近くに、この地を新堀山と記す筆塚の碑が並び立つことになったのです。これでは、二つの碑は同じ山に建つてながら、異なる山の名前を用いていることになります。

あらかわ
タイムトノネルス㉖

もう一つの南千住の生薬 —長寿金龍丹—



写真1 長寿金龍丹掛け看板（当館蔵）

先頃、ある看板が当館に寄贈された（写真1）。額には梅の彫刻を施した、61.7×127.8cmの大きな掛け看板である。掛け看板とは、通りに対して軒先に直角に掛ける形式の看板である。両面に商品名や店名が記されているので、往来する人びとがどちらの方向からやって来ても見えるようになっている。

さて、中央の、陽刻の文字に金箔が押されている「長寿金龍丹」とは薬の名前である。その左側には、「本家調合所 江戸千住小塚原町 永松軒」とあり、「萬壽無疆」の落款がある。限りない長寿を、というような意味の言葉である。「千住小塚原町」が現在の荒川区域だったことから、旧蔵者から連絡をいただいた。

これまでに、「金龍丹」という薬を「松繁」という者が作っていたことがわかっている（写真2）。この「松繁」は、恐らく松屋繁治郎のことと、すると小児活生丸の南千住の薬屋、飯塚勝三郎の弟に当たる。彼らの親庄五郎は、元々、長寿金龍丹と胆麝円を製造・販売していたが、弘化4年（一八四七）2月、裏屋敷（建家共）、土蔵、長屋、そして胆麝円の薬法及び諸国の得意先を勝三郎へ譲った。この時、勝三郎は分家し、薬の名前を胆麝円から活生丸と改め、効能書も作られた。勝三郎は養子だった

ていたとのことだった。その仏具屋は、位牌のほか、薬も売っていたとのことだが、30年位前に店をたたんでいる。その際、旧蔵者が預かったので詳しいことはよくわからないとのことであった。

ではどのような薬だったのか？ 領の右側には、「かんせきりういん」の「妙藥」と書かれている。「長寿」というからには、子供専用ではあるまい。

ちなみに、慶応3年（一八六七）、河竹黙阿弥作の「吹雪花子町於静（お静礼三）」には、大橋の松屋のなかなか得難い目の薬として、「鮑の真珠」（眞珠の目薬）という飲み薬が、登場する。

○ ○

聞き取り調査によると、かつて飯塚家では、小児活生丸を置く薬屋に、ボール紙の広告を配っていたという（写真3）。もしかすると、今回寄贈されたこの看板は、同じような慣習が江戸時代にまでさかのぼることを示唆しているかもしれない。

最後になりますが、寄贈者の越谷市の桃木源之助さんと仲介してくださった迎撃院住職塚田有祥師に感謝申し上げます。

（亀川泰照）



写真3 小兒活生丸広告（当館蔵）



写真2 金龍丹引札（筆者蔵）

めか、本家は、弟の繁治郎が継ぎ、長寿金龍丹の製造・販売を続けた。



写真 『日暮里町政治沿革史』(日暮里町政治沿革史編纂部)

2人の鋳造家 写真は、『日暮里町政治沿革史』(昭和6年〈一九三一〉刊行。以下『沿革史』と略す)に掲載された昭和5年の「日暮里町生産品展覧会」の展示風景である。この展覧会は、日暮里町の産業の振興や発展のため、各業界からさまざまなものが出展された催しであった。地域産業にこだわった、今でいうならば「日暮里ブランド」ともいべき中に、2人の職人の名

こぼれ話 (11) 職人

『日暮里町政治沿革史』に見る
日暮里の鋳造家

前が見える。「堀川子之吉」と「平塚春造」である。
出品作品について 前出の『沿革史』や『日暮里町生産品展覧會報告書』(当館蔵)の第30号室金属工芸品の欄によると、堀川氏は、「(品名)美術置物(住所)大字日暮里六百十八番(点数)八(値段)三三三〇〇」、平塚氏は、「(品名)銅器置物(住所)大字日暮里三十番(点数)二八(値段)一九五五〇」と記録されていて、出品した数は1点ではなく複数あつたことがわかる。堀川子之吉の立札の近くには、布袋像、大黒像、馬像、獅子像などの作品がみえる。斜めから撮られた写真であるが、展示された鋳造の作品群からも職人としての仕事ぶりがうかがえる。堀川家、平塚家は日暮里で代々鋳造に携わってきた家である。



堀川家 堀川子之吉(明治20年〈一八八七〉頃生)は鋳物師で、岡崎雪声の門下である島政吉に学び、大正9年(一九二〇)頃に本郷(文京区)から日暮里に移り住んだ。岡崎雪声は明治から大正にかけて活躍し、東京美術学校の教授も務めた人物である。子之吉は、堀川次男氏(故人、区指定無形文化財保持者〈工芸技術・鋳造〉)の実父にあたる。次男氏は堀川鋳金所として会社をおこし、その作品として浅草寺の天水桶、學習院大学や明治大学の門標など数多く手がけている。先日、大山阿夫利神社下社(神奈川県伊勢原市)の奉納物の一つと思われる神鈴の裏にも「堀川鋳金所」の文字を見つけたが、これは堀川次男氏が手がけたものようである。現在、その技術は、三代目の松本隆一氏に受け継がれている。松本氏は荒川区登録無形文化財保持者(工芸技術・鋳金)として、美術工芸品をはじめ、看板などの注文による仕事を行っている。

平塚家 もう一人の出品者、「平塚春造」は、日暮里の諏方神社の近くに在住した、「日暮しの岡—東に筑波、西に富士」の著者である。日暮里の昔をよく知る町の「古老」でもあった。春造氏の父、駒次郎は鋳造家で、現在の西日暮里三丁目で平塚鋳金所をかまえた。彫刻家の高村光雲もやってきて仕事を頼んでいたという。岡崎雪声の助手として芸大(東京美術学校)の技官を務めていた(地域雑誌『谷中根津千駄木』9号、一九八六年)。著名なものは高村光雲や岡崎雪声らと組んで行った上野(台東区)の西郷隆盛像(明治31年)、皇居外苑(千代田区)の楠公像(明治33年)などがある。



なお、駒次郎のお孫さんからの聞き取りによるところ、家には當時駒次郎が鋳造した西郷隆盛像や楠木正成像の鋳造の見積書が残っていたそうだ。春造氏は、父・駒次郎が亡くなるまで仕事を一緒に手伝つて行つていたというから、展覧会の作品は、本人が手がけたものと思われる。



明治大正の頃より、日暮里界隈には多くの職人が住んでいた。『東京名工鑑』(明治12年)によると金杉村(区内では現東日暮里四丁目周辺)あたりに鋳造の他、工芸技術を持つ多くの職人の名前がみえる。沿革史を見ても鋳造に関する10人の出品人の名前がみえている。

こうした記録によって、日暮里で伝統の技術を今に伝えてきた堀川氏、日暮里を愛し、往時の記憶を残してくれた平塚氏、両人の足跡を、ほんのわずかではあるが再発見することができた。これからも先人たちが残してくれた記憶のかけらを発掘していくきたいと思う。

〈八代和香子〉

あらかわ
タイムトノネルズ㉓

金庫に貼られたお札



写真1 木製金庫
扉を開けた内側に、お札が貼られている。
金庫の中には、破損した棚板が入っていた。

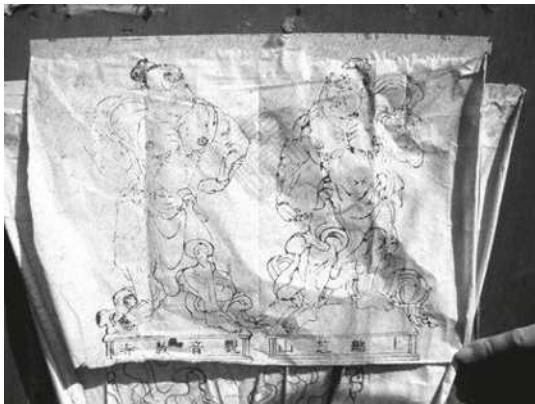


写真2 お札
台座の上に立つ仁王尊が描かれている。
仁王尊の上から、朱や黒の印が押されている。

謎の木製金庫 今年の 4 月中頃、当館所蔵の生活文化財の整理作業中、大きな木製金庫（写真1）があつたので何気なく扉を開けてみると、扉の内側に見慣れないお札が貼つてあることに気が付きました。木製金庫の大きさは、幅 2 尺 2 寸（666 mm）× 高さ 2 尺 5 寸（751 mm）× 奥行 2 尺 1 寸 5 分（651 mm）で、大人 2 人がかりで持ち上げる程の重さがあります。商家などで使用される錢箱などとは違い、金庫としては造りが粗雑のようないい象を受けましたが、1 尺 5 分（45 mm）もある厚い板が、中身をしっかりと守つていた様子が感じられます。昭和 55 年（一九八〇）に、西尾久の旧家から寄贈されたということ以外、詳細

謎のお札 お札（写真2）は全部で 3 枚貼られています。習字の半紙程度の大きさの和紙に、いずれも木版摺りで仁王尊の姿、そしてその台座に「上総芝山」、「觀音教寺」と摺られています。紙質や図柄が微妙に異なることから、使われた版木や摺られた年代がいざれも違うようです。また、扉にはお札を重ね貼り返し授かっていたようです。

お札の正体 お札に摺られている「上総芝山」「觀音教寺」の文字を手掛かりに調べてみると、現在の千葉県山武郡芝山町にある天應山觀音教寺福聚院（以下、觀音教寺と略）のことであると分かりました。『芝山町史通史編中』（以下、「芝山町史」と略）によると、觀音教寺は天応元年（七八一）の創建と伝えます。片開きの扉を開けると、内部は破損しているものの、棚板で 2 段に仕切つて使われていたようです。そして、扉を開けた内側にお札が。一体何のお札なのでしょうか？

情報が残されていません。しかし、その木製金庫は現在一般的に使われる洋釘とは違い、明治以前に広く使われていた和釘で組み立てられていることから、江戸時代の頃の技術を用いて作られたものと推測できます。片開きの扉を開けると、内部は破損しているものの、棚板で 2 段に仕切つて使われていたようです。そして、扉を開けた内側にお札が。一体何のお札なのでしょうか？

下、觀音教寺と略）のことであると分かりました。『芝山町史通史編中』（以下、「芝山町史」と略）によると、觀音教寺は天応元年（七八一）の創建と伝えられ、本尊に十一面觀世音大菩薩、脇侍に芝山仁王尊が祀られています。江戸時代には、関東の天台宗寺院の中でも有力な寺院であり、庶民からは、火事・泥棒除けの祈願寺として信仰されました。仁王尊の

お札は、その効験を願つて貼られたものだったのです。今でもこのお札は、火盗難除・災難除けにご利益があるお仁王様の御真影として扱われています。かつて、西尾久で木製金庫に貼られていたお札は、遠く離れた千葉県山武郡芝山町のお寺から授かったものだったわけです。

觀音教寺のお札がなぜ荒川区に？ 觀音教寺の名が江戸庶民に広く知れ渡ることになつた端緒として、安政 4 年（一八五七）に本所回向院で行われた出開帳があります。「武江年表」によると、出開帳は 4 月 16 日から 60 日間行われています。本尊十一面觀音と仁王尊像が開帳されたほか、尊像が江戸に到着した 3 月 21 日には、力士がその厨子を担ぎ、期間中には見世物が出され、多くの人が見物したとされています。また、万延元年（一八六〇）には、觀音教寺境内の松から造られた仁王尊像の写しを安置する出張礼拝所が浅草に開設され、往復 3、4 日をかけずとも芝山仁王尊の参詣が、手軽にできるようになりました（『芝山町史』）。觀音教寺や仁王尊への信仰は、確かに江戸の町に浸透していたようです。

今回のお札が、どのような経緯で入手されていたかは不明ですが、金庫そのものに火盗難除・災難除けのお札を貼つた事例であること、また、区内で遠く離れた芝山町の觀音教寺への信仰が確認できたという点で、貴重です。

（関悦子）